

| | |
|-----------|------------------------|
| ポスターセッション | |
| 報告テーマ | 犬との触れ合いによる認知症の進行の緩和の検証 |
| 法人名・事業所名 | 社福)一誠会 グループホーム初音の杜 |
| 報告者 | 大畑晃子(介護職員) |

| | | | |
|-------|---|-------|--------------|
| 電 話 | 042-691-8289 | F A X | 042-692-1772 |
| 事業所紹介 | 平成 23 年 4 月 1 日開設されたグループホームです。平成 26 年 11 月には国際品質規格である ISO9001 の認証を取得しさらなる介護サービスの質の向上に努めています。平成 30 年 9 月に第二階楽園ホーム、看護小規模多機能居宅介護事業等 7 事業がオープン予定です。 | | |

【はじめに】

平成 26 年より当法人では犬、猫、モルモット等を飼育し動物介在活動を行っています。前年度先行研究として、別ユニットで実践した取り組みでは、要介護 2 徘徊や興奮の症状が強く見られた利用者 A 氏には BPSD (以下 NPI-Q と略す) の緩和がみられていた。

一方で、認知症の進行が見られ重度の要介護利用者に対して積極的なアプローチが出来ていないことが課題であった。

【実践の内容】

対象者：B 氏 女性 要介護度 5

既往 アルツハイマー型認知症 ADL 評価 (Barthel Index) 6/1 現在→0 点

左大腿部頸部骨折 (平成 30 年 3 月) 硬膜下血腫 (平成 30 年 4 月) 肺炎 (平成 30 年 5 月) で入院を繰り返していた。

入院前は笑顔が多く多弁で明朗であった。退院後は表情が無く言葉を発する事がほとんど無くなってしまった。以前本人やご家族より、動物が好きとの聞き取り情報があった。

要介護状態も重度化し活気や感情が乏しくなっている利用者 B 氏に対して動物と触れ合うことにより、活気が高まり感情の表出の改善が期待できるのかを検証した。

① 本研究では、B 氏がお好きというアセスメントにより法人内で飼っている犬を活用した。

触れ合いによる検証期間は 1 ヶ月間：朝 9：20 より介護職員が触れ合いの声掛けを行い実施する。時間は決めず B 氏の様子で行う。無理強いはいせず疲労も考え最長時間は 20 分とする。

検証方法として対応した職員は必ずケース記録を記載、表情の変化、発言、行動を記載する。

BPSD 評価を使用し検証前と後の比較を行う。(6/1, 6/15, 6/30)

② ADL 評価 (Barthel Index) (6/1, 6/30)

③ フロアー職員 7 名に動物介在活動実施前と後の変化のアンケートを実施した。

成果として、B 氏が犬に触れようと車椅子から立ち上がる等の素振りが見られ意欲の向上や感情の変化に現れたといえる。(笑顔が多くなり犬との対話や他者との会話も増えた) この事によって、理解度も上がり NPI-Q の数値が下がった物と考察する。さらには、入院前の B 氏の生活の状態まで戻るまでとは至らないが、食事を自力摂取できるようになっていることや職員の声掛けに対して衣服の着脱の動作も徐々に行えるようになり、活動にも参加できるようになり QOL の向上が図れることにつながっている。

【倫理的配慮に関する事項】

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。